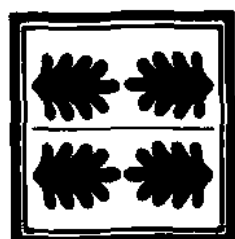


兒童の門

佐藤 一 郎



講談社文庫

兇悪の門

生島治郎

昭和55年 3 月15日第 1 刷発行

昭和55年 5 月15日第 2 刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Jiro Ikushima 1980

Printed in Japan

0193-361628-2253 (0) 340 円

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

兇悪の門

生島 治郎

目次

兇惡の門	七
兇惡の土地	四三
兇惡の回路	七九
兇惡な夜の匂い	一二七
兇惡の空	一六一
兇惡の骨	二〇七

兇悪の門

兇惡の門

——この門をくぐる者 すべての望みを捨てよ

おれがその監房^{かんぼう}へ放りこまれたのは午後五時をまわった頃だった。

鉄の扉が背後で非情な音をたてて閉まったのを聞いて、おれはむしろ一種の安らぎさえ感じた。

留置場から未決^{みけつ}へ、さらにこの刑務所でこれからの囚人生活についての講習を二週間にわたって受けさせられた上で、ようやく本格的な既決囚^{きけつしゅう}たち——つまり、ほとんどが前科もちの海千山千の囚人たちとの生活にこれから入るわけだ。おれはようやく一人前の囚人の扱いを受けることになったのだった。

その監房は定員十人の雑居房で、しかし、実際に収容されているのは八人である。八人の男たちは無表情な顔つきでおれを迎えた。おれも無表情に彼らを眺めやった。かつての刑務所では新入りは古顔の囚人に丁寧な挨拶をしなければならず、場合によってはシキテンと称するなんらかのつけ届けをする風習もあったようだが、現在ではそんなことをする必要もなさそうだった。

彼らは四時四十分には作業を終り、ちょうど監房に帰ってきて夕食を待っているところであつて、新入りのおれに対する興味よりも夕食に対する関心の方が目下の重大事のように見えた。

おれにじろりと一瞥^{いちべつ}を与えたきり、彼らは食器をさし入れする鉄格子のはまった窓の方を熱心にみつめていた。無視されたことを幸いに、おれは房の片隅に腰を下ろし、房内を仔細^{しさい}に観察し

た。房内は意外なぐらいきちんと整頓され、塵ひとつとどめないほど清潔だった。もっとも、男八人がつめこまれているのだから、男くさい、一種独特の匂いがこもっているのは消しようもないが……。

雑居房の内部は畳十五枚が敷かれるぐらいの広さがあつた。

正面の中央に鉄の扉があり、その扉には外側から開けられるようになっていて監視窓がついてゐる。扉の両側は下半分がコンクリートで、その上に鉄格子の植えつけられた窓があつた。窓は上下にひきあげられる形のもので、窓をひきあげると、鉄格子の間からちようど食器が出し入れできる程度のすき間がある。

房の内部のほとんどは板敷きでその上に^{ござ}蓆が敷かれてあつた。一番奥の部分だけがコンクリートになっていて、その扉から向つて左が便所、中央に流し台、その右に三段の棚がついてゐる。流し台には洗面用と^{ざんぱん}残飯を入れる^{かなだらい}金盥がきちんと並べられてあつた。棚の上には囚人たちの私物がこれも見事に整頓されている。

板敷きに蓆を敷いたところ——つまり、居住区にあたる部分の正面から向つて左側には囚人たちの布団が正確に角をそろえて三つ折りに畳まれ、その上にこれもきちんと畳まれた毛布がのせられて並んでいた。右側には木製の細長い四角の机があり、これは食卓の役目を果してゐて、その周囲にはやはり木製の椅子がとりかこんでいた。

それらの光景を金網をはった二条の蛍光灯が浮かびあがらせてゐる。

こういう房内の様子はすでにおれにとっておなじみのものだった。未決房に放りこまれたときもこのことづくりはまったく同じだったし、新入り用の監房で二週間の講習を受けたときも、これ

とそっくりの監房で暮してきたのだ。

ただし、おれが今まで過してきた監房とことのちがいは、この中にはすでにもう何年もの間刑務所の飯を食ってきたベテランや何犯という前科もちがごろごろしていることだろう。

といって、人相からこの中のどいつが兇悪犯であるかという区別はつきにくかった。囚人はみな灰色の囚人服を着て、髪を短く刈っている。おれにはどの男も同じように見えた。かつて、囚人はアオテンと称する青い囚人服を着せられていたものだそうだが、今ではそれが灰色にかわり、この囚人服は二着ずつ支給されている。下着も同じく二着であり、作業に出るときだけ作業服を着ることが許されているのだった。

四日に一度ずつの入浴も許されているからいずれも一応は小ざっぱりした感じで、監房の中の整頓ぶりといい、營養の行き届いた囚人たちの血色といい、このふんい気は刑務所というより、軍隊を思わせた。

未決の監房では、ここと全くつくりは同じとはいえ、未決囚の出入りがはげしいから、あまり掃除も行き届かず、この既決囚の監房よりずっとうす汚なかった。あそこでは、まさに豚箱という感じである。

その点、ここではみんなが永年の生活を強いられていて、なるべく居心地よく暮そうと心がけているせいか、ずっと住みよさそうだった。

おれが片隅に腰を下ろしている間に、他の囚人たちは食卓と布団の間の莫座の上に座布団を二列に並べた。

大柄な肩はばの広いがっしりした身体つきの男——ちようどおれと同じくらいの体格の囚人が

おれに鋭い眼を向けた。

「おい、おめえだって、ここのしきたりは知っているだろう。晩飯前の点呼がはじまるんだ。座布団を並べるのを手伝ったらどうだ？ 新入りのくせに態度がでかいぞ」

「そうかね」

と答えて、おれはニヤリと笑ってみせた。

「態度がでかいのは生れつきでね。そのうちここのしきたりに馴れたら、おれも手伝うことにしようよ」

「ふん」

男はおれから眼をそらし、きつさと座布団を並べながら、捨てぜりふのようにつぶやいた。

「おめえがシヤバでどんな犯罪をふんできたか知らねえが、ここではそんなものは通用しねえぜ。いまに思い知らせてやるからな」

おれは黙って男を無視した。

昔はとにかく、今の刑務所では、囚人同士のリンチはほとんどない。そんなことをしてバレルば、たちまち懲罰房に放りこまれる。

せいぜい、やつらの出来ることは、真夜中、看守のすきをねらって毛布をかぶせ、声が外へもれないようにしてみんなで殴りつけるぐらいのことだ。そんなリンチなら、おれにも対抗手段はある。むざむざやつらのなすままにしてはおかない。こっちも懲罰房に入れられる覚悟さえできていれば、やつらも一蓮托生で懲罰房に放りこまれるように大暴れしてやる。

いずれにしても、現在の刑務所は昔にくらべればずっと紳士的で、刑務所暮しの永い囚人が絶

対の権力をにぎって新入りを自分の思うとおりにイビるということはあり得ない。新入りは古手の囚人のことを先輩と呼ぶが、古手の囚人も新入りのことを呼びすてにはしないでちゃんとさん付けで呼ぶのである。

刑務所における絶対の権威者は看守だけなのだ。

やがて、座布団が敷かれ、囚人たちは扉に向つて二列に並んだ。正座をし、四十五度の角度で頭を下げる。

「点検！」

の声とともに、各房の扉が次々に開く金属的な音が次第にこちらへ近づいてくる。しばらくすると、おれたちの房の扉も開かれ、看守長が仁王立ちになって囚人を眺めまわした。彼は手帳を持っていて、その手帳を見くらべながら囚人番号を読みあげる。その手帳には囚人の犯歴と姓名、囚人番号に写真がひかえてあるのだ。

読みあげられた囚人は勢いよく返事をし自分の番号を名乗り、下げていた頭をあげて、看守長に顔をみせる。

看守長が点検を行っている間に、付きそいの看守が房内に異常がないかを調べ、それが終わると次の房へうつっていく。

こうしてすべての房の点検が終ると、はじめて夕食にありつける。炊事係りの囚人がそれぞれ、房の鉄格子の間から円筒形のアルミ製の食器を差し入れるわけだが、この食事にも等級があつて、一等から五等までに別れている。一等食は食器いっぱい、盛り切りで、五等食はその三分の一程度しか入っていない。もっとも、幅十センチ強、高さもほぼそれに近い容器だから、五等食

ではもの足りないとしても、ふつうは充分すぎるぐらいの量である。麦飯バクシヤリではあるが、夕食には三品の副食もつく。したがって、味覚を問題にしなければ満腹感は味わえるわけだ。いや、むしろ残飯もかなり出るくらいである。この残飯は例の残飯容器に入れ、刑務所内にある養豚場ヤウトンにまわされる仕組みになっている。

とはいうものの、一日の食費は一人あたり約三十七円でまかなわれているのだから、主食の量とはにかくとして、副食のお粗末さはやはり囚人であることをはっきり認識させてくれる。朝は実がどこにあるかわからないような汁一碗とタクアン二片、昼食（これは作業場で食べるのだが）はあやしげなシチューで夕食だけがやや人間なみな食事といえるだろう。

点検後、食卓に向い合つて、おれははじめてこの同房の仲間たちと夕食を共にした。未決房の頃から、おれは与えられた三等食の食事はみんな平らげることになっている。ここに入っているかぎり、健康であることがなによりも大切だ。刑務所で病気にかかるぐらい悲惨なことはない。腹痛や風邪ぐらいでは作業も休ませてはもらえないし、治療室へ行かせてももらえない。まず、死にかけて病人だと判定されなければベッドに横になることは許されないのである。

食事をしながら、隣りにいた男が声をかけてきた。もっとも、こつちを向いて話しかけることはしない。食事をするふりをしながらほとんど口を動かさずにしゃべる。その男は髪が白くなりかけてはいるが細面ほそおもての端正な顔だちをしていた。髪を伸ばし、きれいに手入れをして、灰色の囚人服のかわりにきちんとした服装をすれば中老の上品な紳士に見えるだろう。ただ、彼の眼つきだけは紳士らしくない油断できぬ光りを帯びていた。

「あんた、前科マコはあるのかね？」

と男はささやくように訊いた。

「いや」

とおれもそつちをふりかえらずに短く答えた。

「前科^{マエコ}はねえよ」

「じゃ犯罪^{ハミ}はなんだ？」

「ちよつとある男を痛めつけただけさ。そいつはチンピラだったがね。ヒ首^{ヒツバ}を持っていたんでこつちは鉄パイプで殴りつけた。向うが逃げかけたところを追っかけていつて殴ったものだから相手は重傷を負った。で、過剰防衛ということで執行猶予なしの実刑をくったわけだ」

「実刑の期間は？」

「半年だよ」

「そうか、おれはもうここに二年いる。あと一年で満期なんだ」

男はまずそうに食べかけたサバの煮つけを吐きだした。

「あんたの方が先にシヤバへ出るわけだな。そのときには頼みがある。なあに、簡単な伝言を仲間につたえてもらいたいんだ」

「さあ、そいつはどうか」

おれは無愛想に答えた。

「おれもヤバいめにはあいたくない。話の内容によってはひきうけないこともないがね」
「ま、アテにしてるぜ」

男はうんざりしたように食べ残した食器を押しやった。

「そのかわりここにいる間、あんたの面倒はおれがみよう」

「好意はありがたいが願ひ下げだな。おれは自分の頭のハエは自分で追っばらうことにしているんだ」

「はじめは誰でもそんな強がりを云うんだ」

男はうす笑いを浮かべて、眼顔で向ひにいる男を示した。さっき、おれに向つて新入り呼ばわりをした大柄な男だった。

「あの男は笹崎というんだが、シヤバでは河内組のいい顔だったそうだ。もつとも、ここではシヤバでなにをやっていたかはわかりやしない。みんなけつこうハツタリをかませるからな。ただ、やつは一年前からここにいる。あんたも知っているだろうが、一年前に入ってきたやつは一番やつかいだ。初年兵を二年兵がイタぶるようなもんでね。さっきあんたと笹崎のやりとりを聞いていたが、あんたのあの態度では、あいつはあんたを眼の仇にするぜ。当分の間、あんたはあいつのヒツツキになやまされることになるだろうな」

ヒツツキというのは、刑務所暮らしに馴れない初心者になにかにつけて文句を云い、イタぶる男を指す陰語だった。直接的なリンチや暴力はふるわなないが、新入りがふなれのためになにかへまをやるたびに、いちいち意地わるくやり直しをさせる。布団のたたみ方、敷き方、食器の洗ひ方、房内のしきたりについてちよつとでもミスをやれば、いちいち口汚く罵る。これが現在の刑務所での神経的なリンチである。

たしかに、笹崎という男はおれにヒツツキの役目を果しそうに見えた。といつても、序列の厳しい刑務所内では、たとえわずかでも刑期の永いものには先輩として立てなければならぬ不文